

図書紹介

理系バカと文系バカ

著者：竹内 薫(サイエンスライター)

発行：PHP 研究所／〒102-8331 東京都千代田区三番町 3-10／Tel.03-3239-6298(編集)

／新書判／221 頁／価格 720 円（税別）／2009 年 3 月 30 日発行

最近、理系白書、理系の人々、理系男子、理系資格、理系就職ランキング、理系くん、理系公務員、理系大学院、理系英語、理系のために、理系恋愛 等々理系〇〇がよく使われている。会員諸氏は仕事柄大半が理系ではないだろうか。理系は自分の好きな世界に没頭しすぎて極端な行動に走りやすく、文系は他人の情報を鵜呑みにして場の空気に流されやすい。また、理系は論理的で、文系は情緒的という見方もある。

理系は自然を、文系は人間を研究対象とするが、その考え方はほとんど逆とって面白いくらい異なる。理系の人々は、まず自然をよく観察し、実験をしてデータを集め、そこから法則性を導き出す。文系の人々はまず人間をよく観察し、仮説を立て、それを現実にあてはめて正しいかどうかを確認するという。つまり、理系と文系では、法則性と事実が逆になっている。理系はまず事実があってそれにあてはまる法則を出すという順番なのに対して、文系ではまず法則を立ててそれを事実と比べて検証するということになる。以下、次の序章から第 5 章から構成されている。

序 章 「理系」「文系」って、そもそも何だ？

第 1 章 こんなタイプが「理系バカ」「文系バカ」！？

第 2 章 理系と文系、どちらがトク？

第 3 章 日本は理系人間が育ちにくいのか？

第 4 章 「理系センス」がある人はどこが違うのか？

第 5 章 文理融合センスを磨く 5 カ条

サブタイトルをみていくと、序章では、なんでも分類したがる日本人、理系と文系、運命の分かれ目は、文系人間が支配する時代は終わった、キーワードは「文理融合」などであるが、その分かれ目は当時から文系にくらべ「お金がかかる学部を理系」として振り分けたとか、その分かれ目は「数学がポイント」であることは今でも変わらないようである。第 1 章では、「文系バカ」と呼ばれる 10 の事例、「理系バカ」と呼ばれる 10 の事例についてユーモアを交えて紹介している。例えば、文系バカの典型タイプとして「取扱説明書は困った時にしか読まない」「ダイエットのためにカロリー

オフ飲料をガブ飲みする」など。一方の理系バカは「できれば他人と深く関わらないで生きてゆきたい」「新型商品を買うために徹夜して並ぶ」「意外とオカルトにハマりやすい」など、なるほど思うことが多々ある。第2章では、理系で生きるのは得か損か、理系と文系にとって失敗とは、理系と文系の時間のズレ、文系エリートの限界、エリート主義のどこがいけないのか、メディアを握っているのは文系ばかりでいいのかなど、第3章では、お金のかかる学部とかからない学部、科学系論文数で日本は5位に転落、激減する物理学専攻の学生、日本人の理科離れに歯止めがかからない、理科離れは子供だけの問題じゃない、日本の科学雑誌は青息吐息、科学者のヒドイ扱われ方、才能を潰す日本の教育現場、政府が作るのは人材ではなくハコモノばかりなど、第4章では、理系人間の方が頭が柔軟、微分積分はなぜ必要か、「どうせ文系だから」と思わないなどである。第5章では、文理融合センスを磨く、「理系バカ」「文系バカ」に陥らないための5カ条は、①まず聞き上手になってみる、②文系なのに科学書漬けになってみる、③理系なのにフィクションを楽しむ、④どんな情報もまずは疑ってかかる、⑤気になってものは人に話してみる を挙げている。

本書では、理科離れが著しい日本の現状の警告、教育、政治、メディアにおける科学の啓蒙について具体策を提案している。「理系だ」「文系だ」と区別するのはもう古い。「理系」「文系」と偏らず、バランスのよい「分理融合」を目指すべきであると述べている。文系人間と思う人は理系センスを磨き、理系人間だと思う人は文系センスを磨くべしであると言われると何となく納得できる。(学会事務局)